



和達 清夫・高橋浩一郎 編著
根本 順吉

お天気博士 藤原咲平

NHK ブックス 426, 日本放送出版協会, 昭和57年11月20日発行

藤原咲平博士が日本の気象学会, 気象事業に残された大きな業績, 後進に与えた影響については改めてここに述べる必要はないであろう。本書は博士を敬慕する門下生によって書かれたもので, それぞれの筆者から見た博士の科学者, 気象事業の指導者として, さらに人間としての姿が描かれている。

本書は, I. 日本の気象と藤原咲平, II. 藤原先生と私の2部からなっている。第1部の最初の「藤原咲平の生涯」(筆者: 和達, 根本, 以下括弧内は筆者名)は藤原咲平伝とも言うべきもので, 巻末の年譜, 著作論文目録と共に, 博士の業績と科学者, 気象事業の指導者として発展の過程を知るのに貴重な文献である。師弟, 交友関係その他多くの挿話を交え興味深く述べられ, 大正, 昭和初期の日本気象学史の一断面をうかがうこともできる。これに続く「音の異常伝播と気象光学」(畠山久尚), 「ノルウェー学派・ネビア・ショウ卿と藤原咲平」(荒川秀俊)はそれぞれ気象音響学, 大気中の光象, 大気力学に関する博士の科学的業績と当時のこれらの分野の発展段階について述べられている。「お天気博士」として親しみをもって広く知られていた博士の天気予報観についての高橋浩一郎による「藤原咲平の天気予報観」は, 当時の気象学の発展段階と考え合わせ興味深い。博士は東大物理学科で講義を行い, “気象演習”を指導したが, 当時の学生であった二人の物理学者による「横抵抗, 渦巻, 持続性, 集積性」(渡辺 慧), 「藤原教授の気象学演習」(伏見康治)には科学者として, 独創性を重んじ, 定説にしばられることを嫌った博士の科学者としての考え方, 教育者としての魅力について述べられている。「教育・啓蒙家として」(大田正次)は気象技術官養成所での教育, 著書(「雲」(1929年 岩波書店刊), 「雲を掴む話」(1929年岩波書店刊)など), 雑誌などによる気象に関する博士の熱心な啓蒙活動について述べられ

ている。「中央気象台長, 藤原咲平」(和達, 上松)には1941年(昭和16年)岡田武松に代わり藤原が中央気象台長に就任した経緯, その後日華事変, 第2次世界大戦, 終戦とその後を通じての藤原の気象事業についての熱情と献心的な努力と苦悩について語られている。

博士の生涯に大きな影響を与え, 今日日本の気象学会の基礎をつくった岡田武松との関係は博士の一高時代に始まるが, 性格も考え方も大きく異なるこの二人の信頼, 協力については「藤原咲平と岡田武松の思い出」(岡田群司), および上述の「中央気象台長・藤原咲平」その他に述べられている。

第2部は門下生19名による博士についての思い出を集めたものである。

人間, 藤原咲平については近親者によって書かれた「人間藤原咲平について」(新田次郎), 「父・藤原咲平」(藤原滋水)に博士の国, 郷土, 人に対する愛情, 終戦後の苦悩について飾り気なく語られている。大きな感銘を受けた。

藤原咲平博士は, 今ほど物理学をはじめ諸科学が分科することなく, 社会全体が“技術化”していなかった“良き時代”に物理学を学び科学者として活動した。上述の新田次郎の言葉を借りれば研究に夢をもち続けた。(たとえば渦, 横抵抗などの研究に見られるように), これは博士の自然観, 世界観とも深いかわり合いがあったように思われる。

現代の諸科学, 気象事業は本書に述べられている時代から大きく変貌し, 進歩した。一人の真摯な科学者が, 日本がいわゆる大正デモクラシーの時代から軍国主義に移行し日華事変, 第2次世界大戦の時代, また終戦後の混乱期に生き, 気象事業の指導者として活動して来た姿が本書に鮮やかに描かれている。同じ時代にこれとは別の立場におかれ, 別の考え, 信念で生きた科学者も多くあったことも忘れてはならないであろう。

現在, ますます急速の変貌を続ける社会に生き気象学, 気象事業に活動され, あるいはこれに関心をもたれる。特に若い世代の方々に本書の一読をおすすめしたい。教えられることが多いことと思われる。

(磯野謙治)